

BIRD RESEARCH NEWS

2014年4月号 Vol.11 No.4

参加型調査 写真でカワセミ食性調査！

参加型調査 ツバメの羽色調査

参加型調査 サンショウクイプロジェクト

活動報告 昨年度は冬鳥が少なかった？

生態図鑑 セグロカモメ

研究誌 新着論文



Photo by Yoshiro Watanabe

参加型調査

写真でカワセミ食性調査！ カワセミが食物をくわえている写真募集

青山夕貴子

カワセミのいまむかし

その美しい姿で多くのバーダーを魅了する鳥、カワセミ。昭和初期には東京都心にも普通に生息していたといわれていますが、高度経済成長期に姿を消し、山奥へと生息地を追われていきました。そのため「清流の宝石」とも呼ばれたカワセミですが、1980年代以降、再び都市部に姿を現すようになり、現在は都市部の河川や緑地公園などでもよく見られています。



写真1. こんなコンクリートの河川にも
Photo by 松永紀代子

こうしたカワセミの復活劇の裏側には、都市部におけるカワセミの食事情の改善があるようです。都市部の水辺の水質が向上し、カワセミの食物となる生き物が増えてきたことが主因だと考えられています。

カワセミは何を食べる？

カワセミが都市に戻ってきてくれたことはとても嬉しいことです。しかし、都市の水辺に生き物が増えてきたとはいえ、山中の溪流などと比べると生息する生き物は大きく異なります。カワセミが都市で復活を果たした背景には、カワセミ自身が都市の食べ物に慣れてきたこともあるかもしれません。

魚食で知られるカワセミですが、他にもヤゴ、オタマジャクシ、エビ、時には成虫のトンボまで、多様な動物を捕食する

ようです。しかし、カワセミの食物が広域的に調べられたことはありません。

そこで、“カワセミが食物をくわえている写真”を募集することにしました。写真から何を食べているのかを特定し、さまざまな環境におけるカワセミの食性を明らかにしたいと思います。

あなたが撮影したカワセミ写真、ぜひご提供ください！



写真2. オタマジャクシを食べるカワセミ(幼鳥)

Photo by 村田孝嗣

ご提供いただいた写真をオンラインアルバムで公開しています。写真は撮らないという方も、ぜひご覧ください。

<http://p.tl/M8x7>



* 募集内容 *

- カワセミが食物をくわえている写真
※エサ生物がはっきりと写っていれば、どんな写真でもかまいません。
- 撮影場所
- 撮影日
- 募集期間：2014年7月末まで

■ くわしくはこちら

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kawasemi/
写真の送信もこちらからお願いします。

■ ご質問は青山まで

aoyama@bird-research.jp

参加型調査

ツバメの羽色調査にご参加ください

長谷川克

バードリサーチ調査研究支援プロジェクトにご協力いただいたみなさま、ありがとうございます。今回ご支援いただいたプロジェクトのひとつ、長谷川克さんのツバメの参加型調査についてご案内いたします。

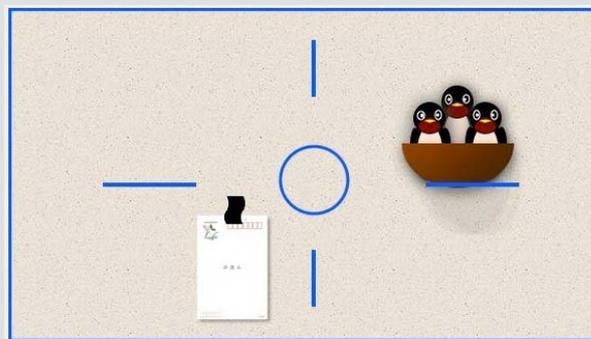
ツバメは古くから多くの研究者によって調べられてきました。本種の研究により数々の知見が得られてきましたが、その形態や色彩が地域によってどのように変わるのか、その違いをもたらす環境要因は何か、都市化や温暖化などの環境変化が進むとツバメが今後どのように変わってしまうのか、そんな基本的、かつ、生物進化を明らかにする上で欠かせない重要なテーマが未だに解明されていません。

今回の調査では、全国からツバメの写真を募集し、羽色の地域差を網羅的に調べあげることで、上記の疑問を解き明かします。これは限られた地域のみで行なわれてきたこれまでの研究者個人による調査では成し得ないことです。

調査方法は官製はがきと一緒に巣立ち前のヒナや親鳥を撮影するだけという簡単なものです(右図)。みなさんが送って下さった写真をもとに、ツバメの羽色の地域差を明

らかにします。得られた成果は国際的な科学雑誌に発表することを目的としています。

下記ホームページから、どしどしご参加下さい！一緒にツバメの進化を解き明かしましょう。



巣にいる親鳥もしくは成長したヒナを、巣の近くに貼った官製はがきと一緒に撮影してください。

- 喉と胸が写るように撮影してください。
- iPhoneまたは指定デジカメ(HP参照)を使用してください。

詳細は長谷川克のホームページへ
<http://masarunrun.jimdo.com/>

参加型調査

サンショウクイプロジェクト

リュウキュウサンショウクイが関東に？

三上かつら



亜種 サンショウクイ	亜種 リュウキュウサンショウクイ
胸から腹は白っぽく 脇にやや灰色味あり	胸から腹にかけて黒っぽい
額の白色部はやや広い	額の白色部は狭い
背中はやや灰色っぽい	背中は黒っぽい
リズムのある声で、 ヒリヒリ〜と鳴く	単調な声で、 ヒリヒリと鳴く

バードリサーチでは、2010年からサンショウクイの情報を収集しています。このプロジェクトでは、日本にいる2亜種、亜種サンショウクイと亜種リュウキュウサンショウクイについて、見かけた日や場所をみなさんに報告していただいています。その成果として、リュウキュウサンショウクイは、2010年の時点で、九州全県、四国、中国地方、奈良県に生息していることが判明し、九州・四国では繁殖していることも明らかになりました(三上・植田 2011)。

リュウキュウサンショウクイは南方の亜種ですが、気温や植生などの条件から、生息可能な場所は関東地方にまで及ぶと予測されました。その予測通り？なんと、2012年以降、さらに大阪府、静岡県、神奈川県からリュウキュウサンショウクイの生息情報が寄せられました。いずれも越冬期もしくは渡りの時期の確認ですが、今後、これらの地域で繁殖する可能性も考えられます。サンショウクイの声を聞いた方、それが亜種サンショウクイなのか、亜種リュウキュウサンショウクイなのか、是非確認してみてください。どちらの亜種でも、もし確認できましたら、サンショウクイプロジェクトまで情報をお寄せいただけると嬉しいです。よろしくお願いたします。

サンショウクイプロジェクト

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/sanshokui/index.html

三上かつら・植田睦之。2011. 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. Bird Research 7: A33-A44

活動報告

昨年度は冬鳥が少なかった？ 植田睦之・平野敏明

冬鳥ウォッチ、冬鳥アンケートへのご協力、ありがとうございました。2013年度の冬は冬鳥が少ないという声が多く聞かれましたが、実際のところはどうかだったのでしょうか？ベランダバードウォッチ、モニタリングサイト1000(以下モニ1000)の情報と合わせて見ていきたいと思います。

アトリ類

2012年度の冬鳥ウォッチには、アトリ42件、マヒワ52件と多くの情報が寄せられ、特にアトリは1万羽を超す大群も観察されました。しかし昨年度の冬はアトリ36件、マヒワ22件で、特にマヒワは前年度の半数以下の件数でした(図1)。アトリは情報の件数こそ2012年度と大きな違いがなかったものの、1万羽を超すような大群は記録されず、大きな群れは2千羽程度が1件のみでした。またいずれの種でも50羽以下の小規模な群れが65%前後を占めていました。

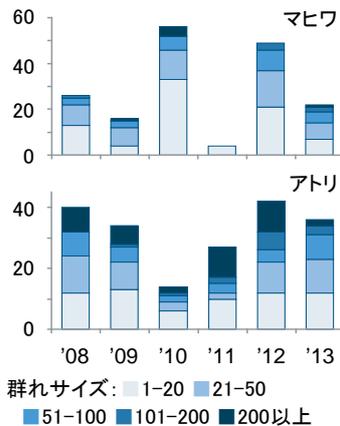


図1. 過去6年のアトリ類の情報件数

これらの結果からは、昨年度の冬はアトリ、マヒワともに少なかったように見えます。しかし、モニ1000のデータでは、昨年度は過去5年でアトリが最も多く記録された年でした。モニ1000の調査地は比較的標高の高い山地にあります。昨年度のアトリは標高の高い山に滞在していて、観察しやすい場所に降りてこなかったのかもしれない。

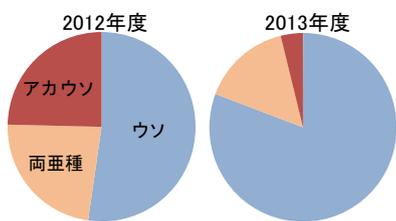


図2. ウソとアカウソの出現割合

ウソは、冬鳥アンケートの結果から、山地では平年並み、平地では少なかったようです。ウソが平地に多い年は、国外から渡来する亜種アカウソの割合が高いのですが、昨年度はアカウソの記録が少なく(図2)、渡ってくるアカウソが少なかったことが平地でのウソの少なさの一因なのかもしれません。

イスカは、冬鳥ウォッチでこれまでで最多の記録が届けました。群れサイズはせいぜい40羽前後でしたが、東北、関東、中部、北陸、近畿、四国と広い範囲で観察されました。

ツグミ類

ツグミは、冬鳥アンケートの結果から、北日本で平年並みかやや多く、九州は少ない場所が多かったようです。ベランダバードウォッチでは、秋口こそ過去3年で最も記録率が

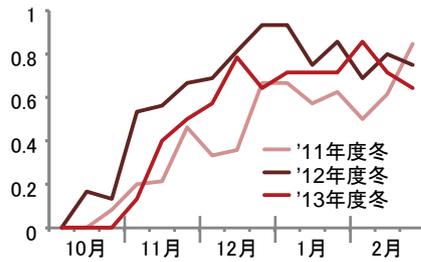


図3. 過去3年のツグミの記録率の季節変化

低かったものの、その後は2011年度と2012年度の中間的な値で推移しています(図3)。シロハラも同じ傾向でした。特徴的なのは、12月中旬と2月上旬に顕著な記録率の上昇がみられたことです。この時期は北日本や日本海側で大雪が降った時期で、ツグミたちが大雪を避けるように低地や暖地へ移動してきて、それが記録率の上昇につながったのかもしれない。

カラ類

2013年度の冬鳥アンケートでは、ヒガラやキクイタダキも低地では少なかったという報告が多く寄せられました(図4)。それはベランダバードウォッチでも同様で、家の周りの調査全375回の中でヒガラは1回のみ、キクイタダキはまったく記録されませんでした。反面、ヒガラは山地では平年並みであったことがモニ1000の調査から見えてきています。

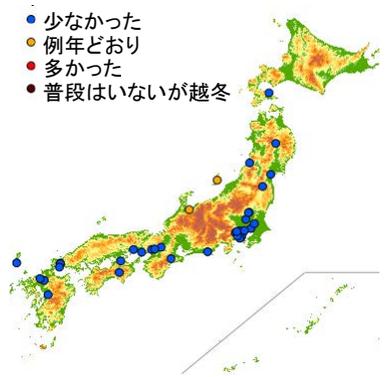


図4. 今年のキクイタダキの越冬状況

木の実の豊凶が重要？

ここまで見てきたように、低地や暖地ではイスカを除き冬鳥は少ない傾向にありました。逆に山地や寒冷地では、平年並みの種がほとんどで、多かった種もあります。これは木の实が凶作だった2012年度の反対で、木の实が豊作だった2011年度と同じ傾向です。昨年度の冬も山の木の实が豊作でした。そのため冬鳥の移動が鈍くなり、暖地や低地で少なく、また北日本は多く南日本は少ないという地域的な違いが生じたのかもしれない。

表1. 昨年度の冬鳥の越冬状況

	低地 暖地	山地 寒冷地	
アトリ	情報不足	多かった	多かった
マヒワ	情報不足	情報不足	平年並み
ウソ	情報不足	情報不足	やや少ない
イスカ	多かった	多かった	多かった
ツグミ	情報不足	情報不足	情報不足
シロハラ	情報不足	情報不足	情報不足
ヒガラ	情報不足	情報不足	情報不足
キクイタダキ	情報不足	情報不足	情報不足

その年の巣立ち率など、冬鳥の多い少ないを左右する要因はさまざまなものがあるので、マヒワやイスカのように他の種とは異なる傾向を示すものもいて単純ではありませんが、木の实の状態でその年の冬鳥の状況をかなり予測できそうです。今後も調査を継続し、情報を蓄積していきたいと思っておりますので、ご協力よろしくお願いたします。

冬鳥アンケートの結果報告のページ
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/fuyudori/q2013.html

セグロカモメ 英:Herring Gull 学:Larus argentatus

1. 分類と形態

分類: チドリ目カモメ科

※亜種および近縁種の分類には諸説あるが、ここでは日本鳥類目録第7版(日本鳥学会 2012)に従う。

全長: 56-66cm 尾長: 146-227mm
 翼長: ♂424-475mm ♀414-468mm
 嘴峰長: ♂50.8-61.7mm ♀47.3-59.5mm
 ふ蹠長: ♂60.2-74.2mm ♀59.5-73.5mm
 体重: 865-1601g

※全長はHarrison(1985), 尾長と体重は佐藤達夫氏による計測値。その他はOrsen & Larsson(2003)による亜種セグロカモメ *L. a. vegae* の計測値。

羽色:

雌雄同色。4年目で成鳥羽になる。亜種セグロカモメの成鳥は背と翼の上面が灰色で、翼の先端が黒く、その先に白い斑がある。頭部から胸、腹にかけての下面と尾は白い。冬羽では頭部から胸にかけて褐色斑がある。脚はピンク色。嘴は黄色く、下嘴の先の方に赤い斑がある。虹彩は黒褐色の個体が多く、眼瞼は赤みが強い。第1回冬羽は、全身が茶褐色で、翼の先端と尾の先端は黒い。嘴は黒っぽく、虹彩は黒褐色。オオセグロカモメの第1回冬羽と似るが、翼の上面と先端の黒色部とのコントラストがより強い。亜種アメリカセグロカモメ *L. a. smithsonianus* の成鳥は、亜種セグロカモメに比べて背と翼の上面の灰色が薄い。虹彩は白く、眼瞼は淡いオレンジ色から黄色味を呈する。



写真1. 亜種セグロカモメの成鳥冬羽(手前)と第1回冬羽(奥)(2009年11月, 北海道茅部郡森町)。

Photo by 先崎理之

鳴き声:

餌を見つけたり奪い合ったりするときに、カーウ、カーウと鳴く。警戒するときに、クァクァクァと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

4~5亜種あり、北半球の中部から北部に広く分布する。日本ではセグロカモメとアメリカセグロカモメの2亜種の記録がある。亜種セグロカモメはオレニョーク川, レナ川からチュート半島にかけてのシベリア北西部で繁殖し、主に日本や朝鮮半島, 中国などで越冬する。国内では全国的に越冬するが、北日本では通過個体が多い。西日本では最もふつうに見られる大型カモメである(小林ら 1991)。亜種アメリカセグロカモメはアメリカ北部で繁殖し、ほとんどがアメリカ南部から中部で越冬するが、少数が日本にも飛来し、東日本, 北日本の太平洋側での記録が多い。

生息環境:

越冬期は主に沿岸域に生息する。岩礁より砂浜を好む。河口や漁港にも多い。内陸の湖などにも飛来する。夜間は漁港の岸壁上や開水面で集団ねぐらをとることがある。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム:

非繁殖期 繁殖期 渡り

一夫一妻。ミシガン湖北部の亜種アメリカセグロカモメの1万巣以上を対象とした調査では、0.3%で一夫二妻, 別の0.3%で雌雌ペアでの営巣が確認された(Shugart 1980)。造巣から育雛まで雌雄共同で行う。巣位置に対する執着性があり、毎年ほぼ同じ場所に営巣する個体が多い。

巣:

地上に直径40cm程度のくぼみを作り、その周りに草やコケなどを巣材として置く。藪などの植生のそばに巣を造ることが多い。

卵:

通常3卵産む。鶏卵より少し大きく、約70~80ml。一腹の中では後に産まれたものほど小さい(Parsons 1972)。通常は薄い褐色地に濃い茶色の斑があるが、オリーブ褐色地でほとんど斑がないものも時々見られる。オリーブ褐色の卵を産む親鳥は、何年も続けてこのような卵を産むことが観察されている(ティンバーゲン 1975)。

抱卵, 育雛:

抱卵期間は30日前後。孵化後約6週間であまり飛べなくなる。Parsons(1975)によると、3卵孵った巣における孵化後7日以内のヒナの死亡率は、孵化順に19.7%, 20.8%, 55.2%であり、最後に産まれたヒナは死亡率が高かった。

渡り:

日本には主に冬鳥として飛来する。大阪市立自然史博物館の和田岳氏に

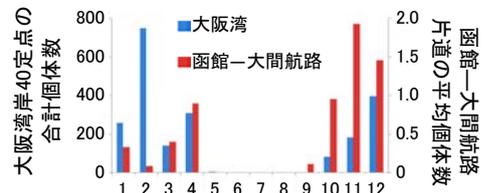


図1. 大阪湾と津軽海峡の月ごとの記録個体数。

よる2010~2011年の大阪湾岸40定点のモニタリングでは、10月に飛来し、2月にピークを迎えた(図1)。一方、北方圏生物研究会による2006~2013年の函館-大間航路(津軽海峡)のセンサスでは、9月から見られ始め、11月をピークとして厳冬期には減少し、3~4月に再び増加した(図1)。この傾向は、函館-大間航路では大阪湾に比べて、渡りの中継地として通過する個体が多いことを示している。

近年、ジオロケータによって日本で越冬する個体の繁殖地が解明されつつある。千葉県市川市行徳でジオロケータを装着されたある個体は、2012年3月下旬に行徳を去り、4月中旬に東北沖、北海道北部、サハリンへと北上し、4月下旬~5月上旬にオホーツク海北部沿岸、ロシア本土に達した(佐藤 2013)。行徳野鳥観察舎の佐藤達夫氏によると、この個体の2013年の繁殖地はシベリア北東部のコリマ川流域と推定されたが、別の個体ではこれ

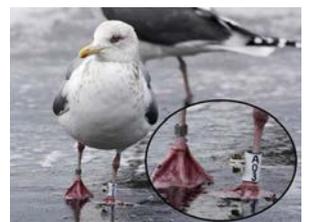


写真2. カラーリングとジオロケータを装着された個体(2013年2月, 北海道函館市)。

より約800km西のヤナ川流域付近と推定されており、同じ地域で越冬する集団でも、複数の異なる地域で繁殖する個体で構成されていると考えられる。

現在国内では、佐藤達夫氏と長崎大学の山口典之氏によって本種への標識が行われており、いずれの個体も左足にプラスチック製のカラーリングが装着されている(写真2)。標識個体の観察記録は、国内で越冬する本種の渡りルートや飛来時期などを明らかにする貴重な情報となる。

4. 食性と採餌行動

貝や甲殻類のような無脊椎動物から魚類、鳥類まで動物質のものを幅広く食べ、植物質では穀粒の採餌例がある。陸上や水面で採餌するほか、空中で昆虫を捕食したり、他のカモメ類やウミスズメ類などから餌略奪することもある。潜水はほとんどしない。甲殻類や貝などの硬い餌を食べるとき、空中の高い所から落とし、割れたものを食べる行動が知られている。種としてはジェネラリストだが、個体ごとにみると餌の好みがある場合がある。カナダ東部の繁殖個体群では、それぞれ貝、残飯、海鳥が採餌物の75%以上を占める個体と、これらすべてを同程度食べる個体の4タイプが見られた(Pierotti & Annet 1991)。これらの食性は営巣地の場所や環境によって異なっており、潜在的な捕食者や侵入者への警戒に割く時間の違いから採餌時間の制約を受け、採餌物と採餌域の違いが生じたようである。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 人工的な餌環境を利用

他の大型カモメ類と同様に、漁港や水産加工場で投棄魚を利用する(写真3)。採餌能力の低い個体でも容易に餌を得られる一方で、投棄魚にはエネルギー価や栄養価の低いものも含まれる。繁殖期に質の悪い投棄魚を利用してヒナの成長が遅くなり、繁殖成功度が低下したケープシロカツオドリの例などがあり(Gremillet *et al.* 2008)、本種でもボディコンディションや翌年の繁殖成績に影響するかもしれない。また、給餌場のような多くの個体が高密度で群れる環境では、体や糞が接触することで感染症が蔓延しやすいことが指摘されている。



写真3. 水産加工場で投棄されたアラに群がる亜種アメリカセグロカモメの第2回冬羽(2014年2月, 北海道茅部郡森町)。

● 釣針・釣糸による事故

釣針や釣糸による事故は沿岸域に生息する鳥類に広く見られるが、本種も例外ではない(鈴木ら 1999)。釣針や釣糸が口に絡まり採餌に支障を来したり、誤飲して消化管を傷つけたりする。また、脚に絡まって壊死することもある。負傷したカモメ類は観察機会が多く、釣りなどの市民レベルの人間活動が野生動物に与える悪影響を実感しやすい。事故を身近な問題として認識し、防止に向けた意識を啓発することが重要だろう。

● しばしば観察される交雑個体

大型カモメ類では種間交雑が比較的起こりやすい。セグロカモメにおいては、シロカモメやオオセグロカモメ、ニシセグロカモメの亜種ニシセグロカモメなどとの雑種と考えられる個体が観察されている。特にニシセグロカモメとの交雑個体は通称‘*taimyrensis*’と呼ばれる(写真4)。近年、デジタルカメラなどの撮影機器の性能向上と普及、カモメ類の交雑個体に注目する熱心なバードウォッチャーの増加により、羽色や換羽状況、体型などの外部形態による親種の推定が盛んに行われ(Young Guns 2013)、ブログなどでもしばしば議論されている。アマチュアを含む多くのバードウォッチャーによる情報の蓄積と共有、そして考察は、大型カモメ類の種分化や交雑実態の解明に寄与すると期待される。



写真4. ニシセグロカモメとの雑種, ‘*taimyrensis*’. セグロカモメに比べて足に黄色味を帯び、背と翼の上面の色が濃いなど、両種の間隔的な形態的特徴を有する(2007年1月, 北海道函館市)。

6. 引用・参考文献

- Gremillet, D., Pichegru, L., Kuntz, G., Woakes, A. G., Wilkinson, S., Crawford, R. J. M. & Ryan, P. G. 2008. A junk-food hypothesis for gannets feeding on fishery waste. *Proceedings of the Royal Society B. Biological Sciences* 275: 1149–1156.
- Harrison P. 1985. *Seabirds, an identification guide* (Revised edition). Houghton Mifflin Company, Boston.
- 小林繁樹・竹下雅文・村本和之・林修. 1991. 厳冬期におけるカモメ類の生息分布. *Strix* 10: 161–170.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 小田谷嘉弥・先崎啓之・高木慎介. 2013. 大型カモメカタログ. *BIRDER* 27 (11): 26–33.
- Olsen, K. M. & Larson, H. 2003. *Gulls of Europe, Asia and North America*. Christopher Helm, London.
- Parsons, J. 1972. Egg size, laying date and incubation period in the herring gull. *Ibis* 114: 536–541.
- Parsons, J. 1975. Asynchronous hatching and chick mortality in the herring gull *Larus argentatus*. *Ibis* 117: 517–520.
- Pierotti, R. & Annett, C. A. 1991. Diet choice in the herring gull: constraints imposed by reproductive and ecological factors. *Ecology* 72: 319–328.
- 佐藤達夫. 2013. ジオロケータや標識調査によって見えてきたセグロカモメの渡り. *BIRDER* 27(11): 67.
- Shugart, G. W. 1980. Frequency and distribution of polygyny in Great Lakes Herring Gulls in 1978. *Condor* 82: 426–429.
- 鈴木弘之・松井淳・芝原達也. 1999. 野鳥観察施設において観察された釣針・釣糸などが水鳥におよぼした障害の例. *Strix* 17: 197–199.
- ティンバーゲン, N. 1975. *セグロカモメの世界*. 今西錦司 監修, 安部直哉・斎藤隆史 訳. 思索社, 東京.
- 氏原巨雄・氏原道昭. 2010. *カモメ識別ハンドブック改訂版*. 文一総合出版, 東京.
- Young Guns. 2013. *Young Gunsの野鳥ラボ #08大型カモメの交雑種の推定*. *BIRDER* 27(11): 50–52.

執筆者

平田和彦

北海道大学大学院水産科学院 博士課程 / 大間海鳥研究室

人間活動が野鳥の生態に及ぼす影響に興味を持ち、本州最北端の漁村でカモメ類の採餌生態を研究しています。今回の記事は、各地で調査されている方々から貴重な情報をご提供いただき、なんとか書くことができました。ありがとうございました！



新潟県粟島にて。キクイタダキと。

研究誌 Bird Research 新着論文

ブッポウソウ雛の成長過程における体重と尾羽の変化について

池田兆一・土居克夫・山崎智子・桐原佳介

標識調査の際に計測した尾長と体重をもとに、ブッポウソウのヒナの成長過程を推測した論文です。他のブッポウソウ目の鳥と同様、ブッポウソウのヒナは一度大きく成長してからダイエットして巣立っていくようです。興味深いのは、年によって、繁殖の同調具合や巣内のヒナの体重のばらつきが大きく異なることです。おそらくその年々の気象条件が関係しているのではないかと思います。これだけばらつくのは、夏鳥であるブッポウソウの渡来時期のばらつきが影響しているのでしょうか？それとも春先には少ない飛翔性の昆虫を食べるといった食性をもつために、春先の各個体の栄養状態のばらつきが関わっているのでしょうか？今後の調査でこうしたことがわかってくると面白いですね。



写真. ブッポウソウ

Photo by 内田博

最近記録された日本における野生鳥類の感染症あるいはその病原体概要

平山琢朗・牛山喜偉・長 雄一・浅川満彦

熊本の鳥インフルエンザで、今年も鳥の感染症に注目が集まりました。こうしたことが起きると知人から鳥の感染症について聞かれることもあります。そんな知識がなく困ってしまいます。この論文は2002年以降に記録された野性鳥類の感染症あるいはその病原体についてまとめたものです。知らないウイルスや原虫の名前満載で知恵熱が出そうですが、アメリカで鳥の減少原因の1つになっているウエストナイル熱ウイルスがロシアにまで分布してきていて、北海道で捕獲されたカモ類の血液検査で抗体の陽性反応が出ていることなど、勉強になりました。

八重山諸島におけるカンムリワシの胃内容物

時田喜子・吉野智生・大沼 学・金城輝雄・浅川満彦

2000年から2010年にかけて八重山諸島で回収された16個体のカンムリワシの胃内容物の研究です。オオヒキガエルやネズミ類の捕食による中毒や、殺鼠剤散布の影響が出るのが心配されていましたが、これらの生物は食べていなかったことや、甲殻類が重要な食物であるということが分かりました。胃から見つかった寄生虫の生態(どんな種を中間宿主や待機宿主として利用するか)から、胃内容からは見つかっていなくても、直翅目昆虫や爬虫類、貝類や等脚類を食べたことが推定できるところが、なるほどな、と思い、こんな食性調査手法があるのかと興味深く感じました。



写真. カンムリワシ

外来沈水植物ハゴロモモが繁茂するため池で見られた水鳥の採食行動

渡辺朝一

ハゴロモモという外来水草を水鳥類がどのように利用しているかを調べた論文です。1年間の調査の結果、冬も枯れずに密に茂っているハゴロモモは、ハクチョウ類、マガモ属のカモ類、オオバン等の越冬期の良い食物になっているようだという結論が得られました。このように植食性のカモには良い食物になっているようですが、ほかの鳥にとってはどうなのでしょう。魚食性の鳥にとっては水草の密林は採食を妨げるかもしれませんし、逆に水草が魚を増やすことによって魚食性の鳥にとっても良い影響を及ぼしているのかもしれない。外来水草の鳥への影響を明らかにするために、植食性以外の鳥の調査にも期待したいと思います。



写真. ハゴロモモを食べるオオバン

研究誌も今年で10巻です。これを記念して、バードリサーチが力を入れている鳥のモニタリングの特集を組みたいと思っています。個体数のモニタリング、鳥類相のモニタリング、繁殖成績のモニタリング、生物季節のモニタリング、何でもありです。「モニタリング」にまつわる調査結果をお持ちの方からの投稿をお待ちしています。もちろん特集とは関係のない論文も掲載していきますので、何か面白いデータをもっている方はぜひご投稿ください。【植田睦之】

研究誌 Bird Research の過去記事の閲覧・投稿はこちら
http://www.bird-research.jp/1_kenkyu/

バードリサーチニュース 2014年4月号 Vol.11 No.4

2014年4月28日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
 〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
 TEL & FAX 042-401-8661
 E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: イカルチドリ